



ホ 2
394

ホ 2
394

用言變格例

藤原雅澄撰

凡て諸の用言ハ四段ニ活らけり。四段と云ハ第一位あ韻
かさこなはを一段とし。第二位い韻 きしちにひを二段と
まやらわを一段とし。第二位い韻 みいりるを二段と
し。第三位う韻 くすつぬふを三段とし。第四位え韻 けせて
えれを四段とをること常格ふして萬の用言大ら此格
ある

用言變格例

一

東京大学
文学部
図書印

刊
394

ごときハつまむつみつめと活きら行^ハて取のごと
きハ。どらむとりとるどれと活くがごとし。かくてかさ
なハ。まら七行ハ。いづれの詞も。大らと右の如く活らく
となれど。あやわ三行の喉音ハ。上件^ハの例ハ異ふて。四段の
活^ハなきハ。子細あることなり。中^ハもあ行^ハは活^ハす事ハ。二
餘^ハハ見當らず。こ^ハい^ハく^ハい^ハう^ハと^ハす^ハう^ハは^ハい^ハい^ハなどい^ハふ^ハい^ハ
う^ハゆ^ハハ。あ行^ハの活用^ハは。わらず。皆^ハや行^ハとわ行^ハと。活^ハけり。其

證ハ。後^ハは。あ^ハる^ハを^ハあ^ハま^ハく^ハこ^ハれ^ハ例^ハと^ハが^ハひ^ハて。中二段^ハい^ハ韻^ハ
い^ハふ^ハべ^ハし。

と下二段^ハう^ハ韻^ハとのみ^ハは活^ハく言^ハあり。意得^ハお^ハらず^ハハ。あ^ハる^ハべ^ハ
え^ハ韻^ハ

からず。總て^ハは。わ^ハさ^ハり^ハて。第一^ハは。意得^ハお^ハく^ハよ^ハハ。ま^ハづ^ハ四^ハ段^ハ
活^ハま^ハて^ハハ。第二^ハ位^ハは。な^ハき^ハま^ハく^ハか^ハち^ハい^ハは^ハそ^ハひ^ハつ^ハみ^ハど^ハ
り^ハなどい^ハふ^ハとき。體言^ハハ。なる^ハハ。論^ハな^ハく^ハ用言^ハは。て^ハも^ハお^ハの^ハづ^ハ
ら^ハあ^ハる^ハこと^ハは。の^ハみ^ハい^ハひ^ハ。第四^ハ位^ハは。な^ハけ^ハま^ハせ^ハか^ハて^ハい^ハね^ハ
そ^ハへ^ハつ^ハめ^ハど^ハれ^ハま^ハど^ハい^ハふ^ハとき^ハハ。お^ハの^ハづ^ハら^ハあ^ハる^ハこと^ハは。
い^ハへ^ハる^ハこと^ハは。い^ハなく^ハ。みな^ハあ^ハる^ハせ^ハよ^ハと^ハ令^ハする^ハ意^ハあ^ハる^ハと^ハあ^ハる^ハ
せ^ハむ^ハる^ハ意^ハな^ハる^ハとの^ハニ^ハ。へ^ハなる^ハこと^ハは。さ^ハだ^ハま^ハり^ハな^ハる^ハ中^ハ
二段^ハは。活^ハく^ハ言^ハハ。第二^ハ位^ハは。よ^ハき^ハお^ハち^ハこ^ハひ^ハお^ハい^ハこ^ハり^ハひ^ハき^ハお

などいふハ、をべて四段活は異なることなきを、あらせよ
と令する意あるのみ。あらせしむる意あるのみ。よきよお
ちよよきさせ^避おちさせとやうのみいひ、下二段は活^落
言ハ、第四位よと^避げや^落せはて^泊かね^兼をへ^終とめぬ^止れ^居す^居あど
いふを、おのづからあることとも、あらせよと令する意
あるよ、あらせしむる意あるよ、をべて其位を動くこ
となし、これ四段活と、中二段よのみ活、それ中二段よのみ
くと、下二段よのみ活くとの差別なり。それ中二段よのみ
活きさる證を云ふ。假令^{ナト}バ、か行^カよて^テ避^{ヨウ}のごときハ、よきよ
くとのみ活き。よかむよけとていへ、過^カのごときも、すぎ
すぐとのみ活きて、すがむすぎとていへ、

和のごときも、なきなくとのみ活きて、ながむなげとてい
へ、將^{シヤウ}和^ワをばながむと云ても、あしからぬごと思えるれ
ど、古くハ、奈^ナ疑^ギ年^{ネン}と、さ行^サよて^テ寄^キのごときハ、よくよと活
のみ假字書せり。さ行^サよて^テ寄^キのごときハ、よくよと活
よきむとていへ、但^タこれよもよせとも常^{ジョウ}よとさ
け、中二段よも、下二段よも活く言なり、な^ナ下^ゲよいふ
べし、行^{キョウ}よて^テ落^{ラク}のごときハ、な^ナち^チな^ナつ^ツとのみ活き、おさむお
を、行^{キョウ}よて^テハ、姑^コ見^ミ當^{トウ}ら^ラべ、但^タ不得^{トク}而^ニを、可^カ爾^ニ氏^シと假字書せ
ること、万葉、東歌よ見えこれバ
ふと見るときハ、か^カま^マか^カね^ネとも、か^カね^ネか^カね^ネとも、中二段よも、
下二段よも活く言なりと思へ、此ハ多^タ可^カ稱^{ショウ}を通^{トウ}して、

可^カルと云るのみかり。可^カルと可^カ称^カと意の異ならぬ。て四
段活^カも。中二段と下二段との活を兼さるゝもあらぬを
あるは行^カよて戀^カのごときハ。こひこふとのみ活^カき。こへと
といへば。乞^カをバこへおこひこふこへと四段は活^カうり
り。神武天皇。大御歌。那^ナ許^コ波^ハ佐^サ婆^バとあるも。乞^カさをなり。土
左日記舟人の哥。菜^ナ錢^{ゼン}こへおとあるも。將^シ乞^カかり古今集
序の尾。こひざらめかもとごぢめさる。これハ金^{カネ}く万葉
廿卷。橋の下吹風のかぐさき筑波の山をこひむあら
めうもとあるをとりさるめて。こへざらめあもといへざ
るハ。今古おととりて。四
段の活なきが故なり。ま行^カよて留^ルのごときハ。こひこふとのみ活^カき。こへと

どむと活^カき。こへまむといへば。但^タこれとどむとどめ
活^カく言なり。なや行^カよて老^ロのごときハ。たいたゆとのみ活^カ
を下^カ云べし。おやむおえといへば。萌^モのごときもいもゆと活^カけ
き。但^タこれハもゆもえと常^{ジョウ}もさるけバ。これハ中二段
も。下二段も活^カく行^カよて戀^カのごときハ。こりこると
言なり。あを下^カ云。こらむこれわ行^カよて率^{ソツ}のごときハ。いきわいき
のみ活^カき。こらむこれわ行^カよて率^{ソツ}のごときハ。いきわいき
うとのみ活^カき。こらむこれわ行^カよて率^{ソツ}のごときハ。いきわいき
ゑといはず。ある類なり。その下二段の

よハ右の活

ハ、ナカ、ム、ナ、カ、ネ、ナ、カ、ズ、ナ、カ、ル、又、古、ハ、ナ、カ、
 ユ、ト、モ、云、フ、ナ、カ、ス、ナ、カ、ズ、ナ、カ、ル、云、類、ミ、ナ、ア、韻

上はこそ。の辞あるときハなけと結べり。又なけむなける
なけども。なども云類。みなえ韻。なけと活らきとる例な

ア、下
と活ハクラき、さ行リゐて坐マスのごときハ。まさむまゝますませ

と行^ハて勝^{カツ}のごときい^ハか^ハとむ^ハか^ハち^ハか^ハつ^ハか^ハてと活^ハきな^ハ行^ハ

よて去イヌのごときハ。いなむいふいぬいねと活キきは行ユよて
添ツムのごときハ。そはむそひそふそへと活キま行ユよて積ツムの

み活きとる證を云ふ。加行^{カギョウ}にて遂^{スガ}のごときハ、どぐどげと
のみ活き、^{とむむとぎといはば佐のごときも、とすく}
すけとのみ活きて、とすかむとすきとていはず
さ行^サふて瘦^{ヤス}のごときハ、やすやせとのみ活き、^{やきむや}
とていはば、
と行^トふて泊^{トク}のごときハ、はつはてとのみ活き、^{とむむとち}
果^ミも此定^{チテ}も同^トく秀^{シウ}のごときも、ひづひでとのみ活き、^{とむむとち}
むひちとていはば、愛^{アイ}のごときも、めづめでとのみ活きて、
め^メどむめ^メち^チな^ナ行^{キョウ}ふて兼^{カン}のごときハ、かぬかぬとのみ活き、
とていはば、

かなむかふといはば、重^{オモサ}束^{ツカサ}なども此定^{チテ}あり、不^フ得^{トク}は行^{キョウ}ふ
を可^カふともいふも、通音^{ツウオン}のみあり、活用^{キョウヨウ}もあらば、
て終^{マタヒ}のごときハ、を^ヲふをへとのみ活き、^{をむむをひといふ}
とのみ活^{キョウ}ふすも、此定^{チテ}も同^トく譬^{ヘイ}をととふとつといふも
同^トくきの假^カへていふバといふ意^イの處^{トコロ}を、とてむと云^{イハ}す
とて、ととへバと云も同^トく定^{テイ}あり、古今集序^{コキンシヨ}もいふバ云々
といふよあらべとるも、ととむとていふに、ととへ
むと云るも、さる故^{コト}なり、あゝるを後^{ノチ}ととへバといふハ
言^{コト}の活^{キョウ}法^{ホウ}もあなむと思^{オモ}ひて、ととはバと書^{カキ}るものあり、
それハ四段活^{シダウキョウ}の法^{ホウ}のみか、つらひて二段活^{ニダウキョウ}の法^{ホウ}ある
をあらざるが故^{コト}あるべし、さらば「なづらへバ又この頃や

あのはきむなどいふをも、なみらはバとなくてハ、活法よ
かなえべとやせむ、但し假令をバとひと云ることあれ
バ、譬も、もとハこととむことひとふことへと、四段は活
きしも知べあらば、もしさらばとてバといえむも難あ
るべき、されど古今集序などを祖と、ま行よて留のこ
せむ文のふりよハ、さいえむハ中くなり、
ときハ、どむどめと活き、
れハどみどむとも、どむどめとも、中二段はも下
二段も活のせる言なるべきよし、上よいへり、又止をど
めとむとのみ云て、どまむとみとていはば、覺をさむさめ
とのみいひて、さまむさみとていはざるも、この定あり、

や行ふて崩のごときハ、もゆもえと活き、
もいもゆと活けることあれば、中二段も下二段も、活
ける言なるべし、又愈のごときもいゆいと活きて、いや
むいいとていはば、萎崩冷
費映なども、此定は同、
れとのみ活き、ぬらむぬり
ゑとのみ活き、すわむするといふも、
と下二段と二へは活けるハ、留をといみどむとも、と

各前
云るこ

るべし

よくよすとも、よすよせとも、活ゝいへる類なるべし。古

言ふよさすと云ふその時ハよきむよさしよさすよさせ

と四段は活ありとるまで別なり。
古語は「めろよーよよー」
よりこねづまよーこせ

ね、よ、こさるらめなどいへることある。そのよしを、さ
よせを通え、とる言なりと思ふめれど、これもおのづか
らある意、ハ、第二位よりとのみいひ、あせよと令
むる意なると、あせむる意なるとのちよハ、第四位
よせといひて、あつべきもの詞がまへなるべし。あ
るを後ハ、これも混まなりて、差別なきがごとく、な
れるなるべし。きよせあどいふは、今來縁の意なれば、そを
きよしといへることなきも、よしとよせともと差

別あてしこと
を辨ふべし。

又恐隱オカカレのごときを古言ふ。たそりかくりと

いへること多ければ。たそりたそる。かくりかくるとも。た
そるたそれ。かくるかくれとも。中二段も下二段も。活
く言なるゝと思へるれど。たそらくかくらなどいへ
む。たそらむ。たそりたそる。たそれとも。かくらむ。かくりか
くる。かくれとも。四段は活ける言なるが。たそらむ。かくら

むといふべきを。たそれむ。かくれむと云るは。第一位を第
四位は轉しある變格なるべき。さてこれも第二位は。お
位は。おそれかくれといふとも。上のよとよせとのごと
き差別ありしなるべし。但しあせよと令する意。あせし
むる意からで。自のうへも。物あふよりつきさる意のど
き。おそれかくれなどいひ。單に云ふは。たそりかくりと
のみ云りしなり。あるをその差別なく用ふは。やゝ後の
ことなり。恐オカレは。續紀九卷。宣命も。うけとまそり懼オカレ理坐マサこ
とを。と見え。古今集序も。かつは人の耳をたそり。土左日
記は。海賊のたそりあり。かど體言も云て。其後にかの貫

之を學びて書るものゝハ、たそりとのみあり。隠ハ、万葉集
中も、たかくとありて、古ハ皆あり、これにそれ
かくれハ、單マ云べき言ならぬ。故あり、あるを後マハ、
五音相通なれば、りと云ても、れといひても同ドことあり
と思ハ、古マあらば、奉をバ、あせよと令をるときマハ、
てまつれといへど、單マもさてまつりとのみ云をるを、こ
れをいと後マハ、さてまつれといひとること往こあり、
これあハ、相通の法を知とるのみマて、活法を失へるあ
ゆゑなり。後マも、もとより四段活なれば、たくりとたくれの
件の差別あることなるを、たくりと云べきをも、おくれと
いひとること多きハ、や、混れてあるべし。送をバ、後マ
でも、たくりといふべきを、たくれといひとるマて、
ても

るべし。垂タル觸フル離ルあど四段活マても、又中二段と下二段との
活をかねとるマても、りふりとなりと云と、これふれを
なれと云とハ、件の格を、これらハ後マハ、又忘をのごと
りといひと事を、あらざる人も多くなれり。
きハ、わするわすれと常マハ、下二段マ活けども、わする
わすらと活き、又萬葉廿卷二十、和須良牟砥野ゆき山
ゆきとれとくれとわがちハ、はハ、すれせぬもとあれ
む、これもわすらとわすりとわするとわすれと四段マ活ける

言なるの

万葉三卷卅三丁、玉鉾の道、出立別れ、こゝ日より思ふ、忘時無とあるハ、日をるときなくといふべし。これ古ハ、四段、はとらき、證とをべき。わ

すらむといふべきを、わすれむと云るハ、これも第一位を

第四位、轉して云る變格なるべし。

わすりとわすれとの差別ハ、上件、云る如

し、あるを古くも、わすりといふべきを、わすれとのみ云さるハ、變格を用さるなるべし。

又別も、常ハ

て下二段、活あせども、これも萬葉四卷

十五、衣手の別

今夜從妹も吾も甚く戀むな逢よ、をなみとあれば、

らむ、りわろ、われと四段、活き、亂も、常ハ、下二

段、活あせども、これも萬葉十二、松浦舟、亂穿江の

水尾を、やみ、櫂取間なく、たも、ゆる、あれむ、みだら

む、みだり、みだる、みだれと四段、活き、流も、常ハ、下二段

は、活あせども、これも萬葉十九、丁、は、わち、さぎ、ち、流、辟、田

の河瀬は云々とあれば、なづらむなづりなづるなづれと、
もとハ四段は活き言なるべし。各忘^{スル}のむとらきも准^ズべ
し。此類な多あるべし。
但十九世六丁は、直渡日入國尔所
遣和我势能君乎とある。所遣ハつ
うをさると訓て、つうをさるゝとをいふべき所はあらず。
然るもこれハ良行下二段の活よて、四段は活くべき言は
あらざれば、古ハつうをさるゝのゝ、此二言を一言は約
めて云るゝもあらむ。あうらばみづるゝなづるゝなど
のゝを約めてみづるゝなづるゝ。さて又上の中二段活の下^トい
ゐると云るゝもあるべし。

へる避^{ヨク}ハ。よかすと活^イのゝいへることもあれば、
万葉十二
三丁は、あ

その川高川^{タカカハ}避^{ヨク}紫越^{ムラサキゴエ}てきつまこと
こよひハあけぬゆめやとあり。そのときハ、よあさむよ

あしよあすよあせと四段は活きとるよて別なり。中二段

の過^スをすごさむすごしすごすをこそ。和^{ナゲ}をなごさむなご

しなごすなごせと四段は活^イのすも同じ。避^{ヨク}を俗^{ヨク}ふよけと

いふことあるハ。よかむよきよくよけと四段は活^イけるよ

をあらざるよきを通音にて訛れるならむさて因^{キミ}よ云^ス過^ミを
四段に活く時ハ、すぢさむすぢしすぢをすぢせといふべ
きを、すぐさむすぐをといひ、常はすぐさむすぐをといひ、
まゝ萬葉十四^{三十}丁^四、須^ス吾^ゴ左^サ牟^ムとも見えれば、其も俗の
訛ハ、非^ヒむ、いづれもか^カを、ぐ^グご^ゴと轉していへるなり、和^ワを
なぢさむなぢしなぢすなぢせと云ずして、なごさむなご

しなごすなごせといへるも、件は同じ、又興^{オク}をたきれくと
中二段ハ、活あすを、四段は活して、たこさむたこし、たこ
すたこせとのみいふも、これもか^カをこ^コと轉していへるか
るべし、又生^{ナマ}をば、いあさむいあし、いあすいあせなど活あ
しいひて、いこさむいこしなど、いをざるを、上のよあさむ
よあし^の例^のよて、いふべきことなり、又生^{ナマ}をば、いあすとも、
いけりとも、後までも

云て、いゝむいきいけと四段は活のゝる趣な古
く考合せらるゝことあるまゝいと後まをいゝむとをいゝ
ずして、いきむとのみいふも、第一位を第二位は轉へる
變格なり。いきといふといけといふとハ、よくわかれり。
落^{オツ}いたちねつと中二段は活ける言なるをねとすと活の
ゝいへることもあり。とねわゆれむその時ハ、ねとさむね
とねとすねとせと四段は活けるなり。
ねとさむねとゝといふも、これもをどゝ轉へて云るあ
るべし。紅葉をば、後まハもみちもみつとのみ、中二段は活

く言とねとふも、古くもみとすもみとひなどいひもみ
てるといへることありて、もみとむもみちもみつもみ
てと、これをもと四段は活く言なることさらなり。古今集
の、つひはもみちね松も見えけれも、四段活の格よていゝ
ばもみさぬといふべきを、彼頃ハえやくもみつといふも、
四段活のあることを失ひて、中二段活の格よりて云る
もの、留^{とど}むとゝみとゝむと中二段も活きとゝむとゝめ
と下二段も活ける言なるを、とゝまると活のゝいふそ
の時ハ、とゝまらむとゝまりとゝまるとゝまれと四段ハ

活けるなり。懲^{ユル}をこりこると中二段は活ける言なるを、今
世はこらすと活るゝいふその時を、こらさむこらゝこら
すこらせと四段は活けるなり。果^ハもつてと下二段は
活ける言なるを、とてと活るゝいふこともあれむ。そ
の時ハ、えとさむえとゝえとすえとせと四段は活けるな
り。佐^{タリ}もとをくゝすけと下二段は活ける言なるを、とすゝ

るとも活るゝいふことあれむ。そのときハ、さすゝらむと
すゝりゝすゝるゝとすゝれと四段は活けるなり。重^{カサ}もかさ
ぬかさねと下二段は活ける言なるを、かさなるともいへ
る。その時を、かさならむかさなりかさなるかさなれと四
段は活けるなり。終^ヲハをふをへと下二段は活ける言なる
を、ををるともいへる。その時ハ、ををらむををりをををるを

それと四段は活けるなり。總スグををむると活るゝいふも。此
定なり。止トムはとむとめと下二段は活ける言なるを。とまる
と活るゝいふその時を。とまらむとまりとまるとまれと
四段は活けるなり。覺サムいさむさめと下二段は活る言を
るを。さますと活るゝいふ。その時を。さまさむさましさま
すさませと四段は活けるなり。萎ナユはなゆなえと下二段は

活ける言なるを。なやすと活るゝいふ。その時を。なやさむ
なやしなやすなやせと四段は活けるなり。崩クニ冷ヒユ費ツヒユ映ハユなど
も其定なり。濕ヌルはぬるぬれと下二段は活る言なるを。ぬ
らすと活るゝいふ。その時を。ぬらさむぬらしぬらすぬら
せと四段は活けるなり。居スウはすうすゑと下二段は活ける
言なるを。すゑると活るゝいふ。その時を。すゑらむすゑり

すむろすれと四段は活けるなり。植飢をうまると活
いふも其定なり。かくて又單音の言の得來爲寢經など
いふも。前の二音三音等の言とい異て。るながら一段
て活ける言多き中。寢ハ常もぬねとのみ活けども。古
言はハなさむなせなどいへること多けれど。上一段
は。下二段はぬねと活き言とい思むるれども。なさむ

なすなせなどいづれも尊者のうへを敬ひて。舒いふこ
とよかぎりある事。て見をめさむめすめせなどいふ類
なれば。自餘の活といさゝの異なるべし。爲ハさむす
せと四段は活らすべき言なるは。將爲をさむとも云ず
て。せむとのみいへり。其むさむと云てハ聞よらぬが故
は。第一位のさを。第四位のせは轉しある變格なるべし。こ

れみよりて考ふる。上よ云る中二段と下二段と。二ターへよ
活ける寄も。もといよさむよりよすよせと四段よ活ける
言なるが。第一位のさを第四位のせよ轉して。よせむとい
へる變格よもあるべし。萌ももやむもいもゆもえと四段
よ活ける言あるが。もやむを轉してもえむといひ。留もど
どまむといみといむといめと。四段よ活ける言なるが。ど

どまむを轉して。どいめむといへるよもあるべし。居植も。
もともすわむするすりすゑうわむうるう、うゑと四段
よ活く言なるが。すわむうわむと云ハ。聞よあらぬが故よ。
わをゑよ轉してすゑむうゑむと云。すわるうわるハ。本の
位のまゝよて云。又植木植草などハ。自植りてあるを云こ
となれば。うるきうるくさなど云べきを。さてを聞よあら

ぬが故あるを忽ち轉して、うゑきうゑくさゑど云るもの
ならむもあるべうらば、居もその定なるべし。來ハかむき
くけと四段は活すべき言なるを、將來をかむと云ず
して、こむとのみ云り。其ハかむと云てハ聞よらぬが故
に、第一位のかを、第五位のこに轉し、たる變格あるべし。け
と云るも、後ハ聞えぬども、古くハつうひのけれむ、ける

人やあれなど云ることあり。これを來けり、來ける、と云意
を、けりける、と云る。そのきけを、けと切れむ。約言とも云べ
けれども、もとより、けと活く言なるが故に、あゝいへるまで、
爲をせりせると云も、爲けり爲けると云意を、せりせると
云る。そのあけハせと切れバ、約言とも云べけれども、もとよ
り、せと活く言あるが故に、あゝいへるまで、同例あり。さて

あゝらむこちふま似とり見ふこそがせこなどやうあい
ふこもあゝあれと希ふ意なれば當昔をけといひてけち
ふま似とり見まけまがせこなどいひしあ為をもあゝあ
れと希ふ意のときいせといふと同例なりあゝれども萬
葉十四十八
丁まこそすげ可利己わがせこと假字書もあ
れば後世人の誦ごとくもとよりこといひくなるべしさ

らむそのこい第四位のけを第五位は轉しなる變格なる
べし本居氏の詞の玉緒は源氏物語須磨ふことひこな
むとある歌を引て願ふ意のなむの上へえけせてね
へめれよりつく定まりなれけあむといふべき格
なれども中古以來の詞は定まりの如くまひいひがと
きこと故まかくいへりとやう得はうえ經ハふへと下二
は詳めいへるハさることなり
段よのみ活けり又著似煮乾見射居等の中著見ハるな
ら第二位の言よてきむみむきるみるきべみべなど

活く中、^キあふ^キ著けるといふ意の處を、^キける^キと云ふことあり。その^キ來けるをも、^キける^キといふも同格なり。又敬ひていふとき、^キ着賜へると云意を、^キける^キといひ見賜ふ、^キ見賜ひ^キといふ意を、^キめ^キめすなど、第二位を、第四位に轉じて活る。いへることあるを、^キ自餘の^キ似煮乾射居等、^キは^キ其例なり。如の古言、^キ奈^キ須とも、^キ乃^キ須ともいひ、又^キ似^キ字をの^キとよめることも例どもある。その^キ奈^キハ、^キ似^キの^キ用き^キとるものとするときハ、

乃ハ奈の通音なることさらなり。又まねぶといふハ、真似ぶといふ義なるを、^キ合^キ思ふ^キも^キと^キ似^キハ、^キな^キむ^キは^キぬ^キね^キと^キえ^キと^キらく言ふ^キとおも^キへ^キ乾居ハ、^キひ^キふ^キる^キと^キも^キ中^キ二^キ段^キは^キ活き^キどおちつあなし。

一言にて、^キ可^キ乾^キ雖^キ乾^キを^キふ^キべ^キふ^キとも、^キ可^キ居^キ雖^キ居^キを^キふ^キべ^キう^キ

ども、^キなどい^キへ^キと^キし^キの^キと^キね^キも^キを^キる^キ、^キよ^キし^キあり^キ。乾をふ^キ居を^キう^キと訓る古

證あれむなり。万葉十卷十五丁、^キ靈^キ寸^キ春^キ吾^キ山^キ之^キ於^キ尔^キ立^キ霞^キ雖^キ立^キ雖^キ居^キ君^キ之^キ隨^キ意^キとあるを、^キタ^キッ^キト^キモ^キウ^キト^キモ^キと訓るも、^キげ^キは^キう^キ即^キほ^キし^キほ^キす^キは^キひ^キふ^キと^キ約^キ也^キを^キり^キを^キる^キハ^キろ^キう^キと^キ約^キれ^キべ^キなり。

り、其中居ゐると活きゝこともありとわねれば、中二段
よるう、下二段よろゑと活けるゐ。湯坐のゑな煮射よゐ
ながら第二位よのみ活ゐゝて、動ゐゝとる例なく、かゝる
くその例證よゑとゞひまもらずゝて、その規矩よのみか
かづらひてゐ、推ゝ究めがときことわやゝ、そもゝゝなべ
ての言ふ、常格變格の差ありて、古よりその變格のみ用ひ

來れり、とわもえり、詞も多く、まゝ單音の言ゐ、もろゝ
の言は、活用の法よ、准へがとく、まゝその中よ、法よのみあ
づみてゐ、きをやゐよ、其ゑゑ活ゐゝいふ謂の決めがとく、
さゝとて又法をえなれてゐ、雅俗の分なく、いとみどりお
のみなりて、いふゐひなく、かること、右件よ云る條よ、よて
はとるべゝ、さるゐ、其活動ける音聲の美とくゝて、いさゝ

のもき、ぐるきどころのまぐらぬい。これやがて言靈
 の妙用の。そのまがときどころをありける。もし後人
 力をくもへて、ちとよく結構とらむものならまゝう。バ、今
 くをしくとどらむ。その法も格も、いのでおにきため
 ていそれづるべき。又立かへりて、るとつゞきとる言の例
 をいふ。わのづのらあることをいふ。な。なるま。さ
 鳴坐

るか。るいなる。そはる。つまるとらる。なけるませるかて
 勝去添積取
 めるとれると。ハ、意異。など活らす例。ま。准ふる。ま。戀老率か
 なることさなり。なることさなり。どハ、中二
 段。のみ活く言ふれば。こはる。わ。やる。ひき。わる。などい。を
 ず。遂。瘦。泊。などハ、下二段。のみ活く言ふ。な。れ。む。ど。が。る。や。さ
 る。は。さ。る。な。ど。い。を。す。べ。て。第。一。位。の。あ。韻。の。か。さ。こ。な。は。ま
 ざる。ハ。さ。ら。な。り。や。ら。わ。の。言。ふ。活。動。あ。る。ハ、あ。韻。よ。り。る。よ。つ。く。さ。だ。ま。り
 な。り。こ。や。る。さ。や。る。す。わ。る。う。わ。る。な。ど。も。其。定。な。り。但。一。伏
 伏障居植

言中二段活よして云時ハ、こいこゆといへむ。避^{オノル}落^{オノル}戀^{オノル}などをよかるおころこそると云ざる例の如くなれど、こやりこやるとも、活^イろいへることあれば、これを障^{サヤ}をさやらむさやりさやるさやれと四段は活のすごとく、こやらむこやりこやるこやれとも、活き一言なるべし。又萌^{モユ}燃^{モユ}萎^{ナユ}冷^{ヒユ}崩^{クヅシユ}費^{イユ}愈^{サカユ}榮^{サカユ}など、ひやすくやすつひやすいやすさあやすなどといへむ。もやるなやるひやるくやるつひやるいやるさあやるといふべきを、もゆるなゆるひゆるくゆるつひゆるいゆるさかゆるとのみいふを、これ

も第一位を、第三位は轉^マへたる意、同じけれど、あやわ三言も、自餘の例は異なる故あれば、一準をいひがごとく。又つぎ、依^ヨをよと云べき處をよせと云。ことよせよせくみ云り、きよせなど云ハ、令^セ來^キ依^ヨの意と、賜^{タマフ}をこまひと云べきこえとれば、論なきこと既くいへり。續紀宣命よ、こまへゑらぎとあるなど、き處をこまへと云。こまひと云て宜しき處なり。神樂歌よ、みきをこりてとべゑうてとあるも同じく、こりびとびゑうてとありて宜しき處あり。見こまへ聞こまへあど

云ハ。とまへよ。といふ意なれば論あし。留を。とゞみと云べき處を。とゞめと云。集中。とゞみ。あねと。とゞめ。かねともいひとる。其ハ。たのづから留むることを得ぬ意よし。ても。留まらゝむることを得ぬ意よし。ても。通ゆることなれば。とゞみ。とゞめ。いづれ。云ても。妨なし。あるを。たのづからあること。も。あるせゝむること。も。なべて。とゞめ。ののみ。云こと。なれるハ。後の混淆なり。萌冷映寒等をもいひ。いはいこ。いと云べき處を。もえひえはえこ。えと云。燃萎崩肖費瘡消越榮な。隠恐後垂觸離などを。かくりた。と。此定なるべき。

そり。かくり。こり。ふりはなり。あど云べき處を。かくれ。れ。かくれ。と。れ。ふれ。はなれ。あど云。此類多。准知べし。觸振。全く。同。活の語と聞ゆる。振ハ。後までも。あるせよと令する時。あらでハ。ふれと云ず。ふりとのみ云るを。觸ハ。古言。ふりと云ることの多きを。あらで。ふれとのみ。もとより。いふこと。後人ハ。心得つめり。いづれ。も。これ。准べし。抑。四段の活ある語を。たのづからあること。ハ。第二位。よい。ひ。あるせよと令すること。又。あるせゝむること。ハ。第四位。よい。ふこと。も。との詞が。まへ。あるを。その差別なく。第二位を。第四位。轉して云ハ。變格なり。あるせよと

令する意とも、鳴坐等をなけませなどいふときハ、鳴よ坐
よといふ意なる如し。これとゞふ、第二位を第四位と轉
しとるとハ、別なることさらあり、餘のてねへめえれも同
じ。又あらせしむる意なることハ、かせさせさせはせませ
などを約めて、けてへめなどいふときハ、あらせしむる
ことふなりて、はけハ佩せ、はせハ馳せ、とてハ立せ、つどへ
を集めせす、めハ進ませの意なるが如し。餘ハ准べし。さ
ればこれとゞふ、第二位を第四位と轉しとるとハ、とが
へり、混べうらず、各既く上と云り。又この第二位を第四位
と轉し、いふとハ、反對なることあり、其一二をいふべし。古
今集は、あやなくあとの名をやとちなむとあるハ、令立な
むといふ意なれば、必立せを約めて、とてといふべきを、と

ちとあるハ、かへりていふなり。名とやとちなむとあら
ば、さることなり。又す、きたしなみふれる白雪とあるハ、
令靡といふ意なれば、必靡せを約めて、なべといふべきを、
なみとあるハ、かへりていふあり。万葉集中にも、あさお
ねすなべなどいづれもなべとあるを思ふべし。さればこ
れらのとてなべなどいふもとといふ、第二位を第四位と轉
しとるとハ、異なて、令立令靡の意なれば、第四位はのみい
てむをつとなむと思ひて、第二の本位はかへりていふを、
かへりて非なり。又舒れるうへみて、言を變へて云とる格も
り、とあるべし。

多し。意得たぐべし。日本紀武内宿禰歌は、あふみのみせに

のわさりよかづくとりふなるみすぎてうちよどらへつ。
とあるとらへつハ。とりつの舒でとる言なれば必とらひ
つと云べきを。きりを舒てきらひ。とりをのべてとらひ。か
とりをのべてか。とらひ。さえりを舒てさえ
らひなどの例なとらへつと云。集中七卷三十なげきせ
り。下なる同じ。八丁
む人志でぬべみ山川のときつ心をせのへとるもの。紀長
歌。年月をせのへとあるせかへい。せきの舒でとる言な
といめてとあり。

れば必せのひと云べきを。せのへと云。六卷三十うまの
あゆみねさへといめよ住吉のきくのえよふふほひて
ゆのむとあるねさへい。ねの舒でとる言なれば必ねさ
ひと云べきを。ねさへと云。十六丁八長歌。さへかきなへ
とあるさへい。さの舒でとる言なれば必さへい。ひと云
べきを。さへと云。續紀宣命ふ。あうらへまゝとある。あ

らへ。あ。あ。りの舒とる言なれば。必。あ。あ。ら。ひ。と。云。べ。き。
 を。あ。あ。ら。へ。と。云。又。ま。せ。ま。つ。ら。へ。て。と。あ。る。ま。つ。ら。へ。ひ。ま。
 つ。りの舒とる言なれば。必。ま。つ。ら。ひ。と。云。べ。き。を。ま。つ。ら。
 へ。と。云。これ。みな。第二。位。を。第四。位。と。變^{タカ}へ。て。云。と。る。格。な。り。
 此。類。猶。あ。り。准。べ。し。され。ば。
 上。より。云。自。他。の。差。別。な。く。と。い。ふ。
 第二。位。を。第四。位。と。轉。と。る。ハ。み。な。變。格。な。り。
 五。音。相。通。と。い。ふ。も。

のハ別
 たり。さて。この變格を用ひなれとる詞の中にも。よ。い。も。
 いか。くり。ど。み。な。ど。常。格。よ。い。へ。る。類。も。あ。あ。す。が。小。寧。樂。
 朝。の。頃。ま。で。む。め。づ。ら。し。あ。ね。ど。後。は。を。れ。ら。も。變。格。の。
 の。み。な。れ。て。知。人。さ。へ。も。ま。れ。な。り。と。で。か。ま。さ。ば。古。の。常。
 格。よ。い。へ。る。こ。と。多。あ。り。を。後。や。う。く。と。失。ゆ。き。と。る。趣。な。
 る。も。世。間。の。風。俗。よ。つ。れ。て。語。の。な。だ。ら。む。を。好。む。理。よ。て。
 第二。

位を第四位は轉すハ上段より下
段は下るゝてなごらむゝとなり。つひは音便の類と云む
の、出來む下形なるべし。さて又持モツ以モツなどをもちといふ
と。もてといふとの差異をいふ。たのづゝらある意よ
をもちといひ。あせよと令する意なると。あせゝむる
意なると。ふもてといへど。こと。坐マス添ソツをまゝをひとい
ふと。ませそへといふとの差別と全レ同レ。其證を古事記中

卷五。いゝつゝいもちうちてゝやまむ。又きこゝもちをせ。
下卷五。こくをもちうちてねね。又神のみてもちひくこ
とよ。又とつごもゝもちてこまゝもの。集中のハ一巻五。籠
もよみ籠もちふくゝもよみふくゝもち持十七。みことも
ちとちわれなむ。十八。やほこもちまゐでこゝ。二十。ふ
まそてもちなみごをのこひなど見え。續紀卅六の卷後紀

十四の卷、續後紀一の卷等の宣命ふ。きよきなき心をも
ち。續後紀同ト卷ふ。天の日嗣をいといきもち。靈異記ふ。惆
をもちあそびて。字鏡ふ。鑑をなればはし。銅をもちてか
ざれるそなど見えとる。これらみれたのづから志あるこ
とよいひ。集中十八ふ。うまふつまふねかせもてとある
を。志のせしむることなるよて。その差別著明し。志あるを

十五ふ。なふものもて。あいのちつがましとあるのみ。志
のせしむることふ。あらず。志のせよと令することふ。も
あらねば。あづかの第二位を第四位ふ。轉しとる變格ふ。も
ちをもてと云とるものなりときこゆ。寧樂朝の季つとさ
よりハ。これをもや。變格を用ひをめとるなるべし。今京
より此方ふ。まそてもち。或ハもちあそびて。などいふも

ちをもみかちてとのみ云てもちといへることをもつちな
くなれり。但し按ふ。これをもいふ第二位を第四位と轉し
て。ちをてと云とのみよあらう。其所以をもてと云
ふ。持而の意を帶せて。云をめとる趣よきこゆればなり。今
世文章めらして物らく人よりてをよてとかけること多
し。其ハ俗言よ。よつてとつめていふをそのつめていふを
鄙俗なることをあらて。其をよのぞけバ雅言なりとお
もひとれる。其類よもちてを俗言ふもつてとつめていふ

そのつをのぞきすていふといひ出しとるものなり。と
心得る人もあらむ。これをや、古き時よりいへることよ
て。つまる音のえにまらぬ。えるもの。さてその故ハ持而の
前よいへる言なれば。さよハあらず。さでその故ハ持而の

意ならぬところをもてと云とのこと。後までもなく。然
む。今俗とて。鎗持長持子持金持などの類の持をもてと
いひとること。さらよあし。これよても。持而の意を帶ると
ことあらでハ。もてと云。持而の意なるところをもちとい
ことなきをあらべし。

ひとること。一もあることなく。みなもてとのみ云れば

なり。此類な外もあるべし。

不見而不聞而など云ことを今京よりこなとみでき

あでなどやうまいへり。古くは一つもあることなし。これハ不ズを省きとることあら。不ズの濁のみを残してでヱを濁り。そのでの濁音ム、不ズ而デの意をもさせとるなり。持デ而デをもてといふム、やイ似シとることなり。この類、今京よりこなとの例をいハなハなハかくて又古こと學する人の意得たあでをほコ許シ多有シべし。

得あらぬことあれば。ことの因ナリよたどろあハおくべし。凡

そ雅言のるハつハづく言ハ。第一位のあ韻と。第三位のう韻

と。第五位のた韻とハふハかハぎハれるごとハ。第二位のい韻と。第

四位のえ韻よりハるハみハつハばハけハ云ハるハ。近世の俗言よて、古の

雅言ハいハほハとハくハなハきハがハ如ハし。

但しかハぎハるハをハしハるハくハびハるハまハるハなどハも。第二位のい韻ハよ

り。そのまハいハるハまハつハばハけハいハひハて。第三位のう韻ハ轉ハいハへハることハいハなし。又ハあハげハるハなハぜハるハおハもハわハでハるハくハねハるハかハへハるハふハども。第四位のえ韻よりハるハまハいハるハまハつハばハけハいハひハて。第三位のう韻ハ轉ハいハへハることハなし。そハいハづハれハもハるハまハ四段の活あれ。其中ハも。第四位のえ韻よりハつハづくハもあれど。所ハを別なり。

以^二あることなれば別ことなり其ハ次下^一いふかくて其
 證を云むとする^二第一位のあ韻と第五位のね韻よりつ
 づけさるゑまぎるゝことなけれむ例を引までもなく雅
 言^一第三位のう韻のくすつふむゆよりつづけいふこと
 を俗言^一第二位のい韻のきーちひみい^二轉して云る例
 をいふ^一雅言のねくるねもみするねつるあふるうらむ
 起。重。落。強。恨。

るくゆるなどを俗言^一なきるねもむねるねあるあひる
 りらみるくいるなどいふのごとし又雅言の同じ第三位
 のうくすつぬふむゆるよりつづけいふことを俗言^一
 第四位のえけせてねへめえれゑ^二轉して云る例をいふ
 2. 雅言のうるかくるうするすつるかぬるそふるそむる
 得。懸。失。捨。兼。添。添。
 はゆるなる^一すうるあどを俗言^一えるかけるうせるす
 生。馴。居。

てるかねるをへるをめるはえるなれるするなどいふ
かごとしこの定めて大抵雅俗の差別を辨るゝことなり
其中に雅言ふえろかけろうせろすてろかねるをへるを
めるはえるなれるするなどいふを得而有懸而有失而
有捨而有兼而有添而有添而有生而有馴而有居而有の約
とさる言はて親と屬きとさるは非れば俗言ふ雅言のう韻

をえ韻と轉とさるといふことになりまどふべからず志を
らば第二位のい韻よりるゝつゞくことも雅言は絶て
あることなきといふは然るはあらず其證はいさある
あらびるなどゝ第二位のい韻よりるゝつゞきとる例な
るきろあるなどの類の單音の言よこれらも古の雅言に
なべての例は准るときはいさつるあらぶるなど第三位

のう韻ふ轉してゐるふつゞけいふべきふさる例なり、但し
重^シむ^ル志^スき^ルら^ムむ^ル志^スき^ルら^ム志^スき^ルら^ム志^スき^ルら^ムと活^スる^ルに^キとき^スむ^ルる^ル
四段の活あればゐるぎるなどの如く、第二位のい韻より、そ
のまゝるゝつゞけいふを^ルち^スら^ムなるを、^ル志^スる^ルむ^ル志^スき^ルら^ム志^スき^ルら^ム
けと活^スる^ルすときハ、中二段活のた^スき^ルた^スく^ルあ^スど、ハ異なれ
む^ルる^ルを^ルそ^スへていふことをなし、又走^{ハシ}を^ルは^スら^ムむ^ルは^スり^ハは

し^ルる^ルは^スれ^ハと活^スる^ルすときむ^ルる^ルハ四段の活あれば、^スる^ルを^ルす^ル
などの如く、第二位のい韻より、そのまゝるゝつゞけいふ
を^ルさ^スら^ムなるを、^スは^スす^ルは^スせ^ハと下二段は活^スる^ルすときハ、下二段
活^スる^ルす^ルる^ルなどの如く、^スは^スる^ルと^スい^ハふ^ル例^ハよ^テ、事^ハ同^シく^ハけ
れ^ハど^ハを^ルす^ルる^ルと^スい^ハふ^ルと^スい^ハふ^ルとハ、活^スる^ルの^ル法^ハ格^ハふ^ハより
と^スあ^スへ^ルる^ルの^ルみ^ハな^ハれ^ハば、^スを^ルす^ルる^ルと^スい^ハふ^ルべき^ハを^ル變^ハて、^スを^ルす^ルる^ルと

いへるよをあらば、又ミ雑をまじらむまじりまじるまじれ
と活のときも、まずまぜと下二段は活のすときも、すべ
て上の走の例と同くければ、事ハ同くけれど、まじるとい
ふと、まずるといふとハ、活の法格ふよりてとぢへるのみ
なれば、まずるといふべきをカ變て、まじるといへるよをあ
らず、イサナ哭泣をもとハ中二段は、いさちいさつと活き言と

ねをゆれむ、いさつると云べきを、然いへることなきハ、

とより變格よいひなれとるものならむ。但し哭泣ハ日本紀の訓はイ

サツルとあれば、いさちるいさつるニテハ、いひい其中
よむあらむ。然きども、とハある假字書ハ見えぬ。

2. 荒をバ、古書ふあらびあらぶあらびるあらぶると活用

ろハこれバもとよりニテハ、いひなれとるなるべし。あ
ろを本居氏古事記傳ハ、いさちるとあるハ、いさつるあり
けむを、おを、知ハ後ハ寫し誤りとるならむと云る。理ハさ

ることなれど、おいて改めざるときことなり。本居氏ハ、さむ
り音韻の法ヲ委しき人なりけれど、あ言靈の妙用ハ
ハ、變化かぎりなかりしことを思わざりしとあるぬこと
といふべし。もべて理を言をれて、例ハのみよらざれば、一
槩^{オナ}となりて、行^キじならぬ。そもくわが古の言語^{コトハヒコソツキ}音聲^{メタ}の美^ミく
ところ有^{アル}とあるべし。

妙^{ミタカ}なることを、天地のはじめより、神の御口^{ミコ}づらひひそ
め給ひしことありあれば、さらふあざし國^{サヘリ}の駄舌^{サヘリ}など、
を、かけてもひとしなみよいふべきものあらざれば、

そのもと、故^{コト}ニ轉^{ウツ}し變^{タガ}へていひなれしること、又よりく、
たのづから轉^{ウツ}ひ訛^{ヨシ}りし謂^{イハレ}など、今姑く準則を立てこと
わらむとあるふ、人^{サト}智^チもて知らるゝ、かぎりな、知らるゝ、こ
となれど、ひとぶるふその準則のみよて、推^{スシ}きためがとき
こともあるハ、そのもと、人のさくみよ出^デしることならぬ
むなり、されむことく、よくまなくしとりつくさむことハ、

